

兒童心理學文獻抄

十五

牛 島 義 友

幼兒の唱歌

子供の生活として第一に目につく姿は、友達と仲良く遊んだり喧嘩したり、一人で畫を描いたり、氣の向くまゝに節をつけて獨言を云つたりして居る、あの遊の生活である。故に今後しばらく此の遊の生活をのぞき度い、先づ音樂の方面からみる事とする。

幼兒の音樂生活は聽く事よりも自ら歌ふ事にある。未だ言葉が發せられない四五ヶ月の乳兒でも快適な氣分の時にはアアアウエー等の聲を出して、別に泣くのではなく、訴へるのではなく、唯愉快な感情を音聲に表して楽しんで居る。此状態が後の子供の唱歌と關係があるのでなからうか。即ち少し成長するとお母さんや兄弟や近所の子

供等の唱ふ歌に模して歌ひ出す様になるが、斯る唱歌の旋律の他に、普通の言葉や、話に即興的に節を付けて歌ふ事がよくある。之を話の旋律と云つて居るが、其時々感情の流を自然に現したもので興味のあるものである。

以上の他にお母さんの懷で聞く子守歌に始まつて、蓄音器やラヂオを通して色々な音樂を樂しむが、之は音樂の鑑賞力や理解力を助けるものでは非幼い時から良い音樂に親しませねばならぬ事は論を俟たない。

今普通の子供の唱歌に就いてブレーメルの旋律の理解の研究を述べる。

F. Brehmer: Melodieauffassung und melodische Begabung des Kindes *Beihft. f. Angew. Psychol.*

36, 1925

六歳から十三歳までの子供男女七十六名に色々な實驗をして居るが、先づ子供に自分の知つて居る歌を歌はして其誤りや變化をしらべてみた。

歌には夫々一定の高さが定まつて居てハ調さかト調さか指定されるが子供が一人で歌ふ時には此指定を無視して自分勝手な高さで歌ひ出す。自分勝手云つても自分に歌ひ易い高さにするので、子供は高い音よりも比較的低い音の方が歌ひ易い。子供の聲は甲高いので高い音の方が出し易い普通考へるかもしれないが、實際は逆で、低い音の方が容易で、且正しく歌へる。或九歳の子供は自分の音域より高い音の所に來るに其部分だけ低く歌で、低くなつた時には元通りの高さに直して居た。丁度餘り音樂的でない大人が教會等で聲が出なくなるに自分だけ一オクターブ下げて低音を出したりするのと同じである。

故に子供は教はつた高さよりも低く歌ひ出す傾向がある、其數を示すに次の如くなる。

原音より低いもの 高いもの

六・七歳

二〇

四

七・八歳

二七

二一

十一乃至十三歳女

六三

三

甚しいのになるに教師がオルガンで高い音を先に出してみせても自分は低く歌つて居る。

次に子供は自分の興味に應じて高さを考へてくる。或六歳の女の子は初めハ調で歌つて居たのが、面白くなつたにみえ、第二回目は半音高く嬰ハ調で歌ひ、第三回目はト調になり、次はイ調にまで高まつた、其後興味が減するに従ひ再び低くなつた。

尙次から次々色々な歌を歌ふ場合には前の歌に影響されて、それと同じ高さで次の歌を歌はんとする傾向がある。

例へば六歳十ヶ月の或女の子は初めのカッコウ鳥の歌を變イ調で歌つたら、次の「鳥よ來い」の歌も變イ調で歌つた、

それで實驗者がハ調でカッコウ鳥の歌を歌つて聞かせたら、自分でもハ調で歌ひ、而も其次の「鳥よ來い」の歌までハ調に變へてしまつた由である。今多くの子供に就いて前の歌ミ後の歌ミの類似度を示すに次の如く同一音で歌ふ者が最も多い。

	同一音	類似音	相違音
六乃至九歳	八〇	三三一	四四
十乃至十三歳	三七	二二二	一四

以上の如く子供の歌の調子は色々なものによつて變つて来るが、次に一つの旋律の中にも色々變化が生じて来る。

最も普通なのは水準化の現象であつて、原作には複雑な旋律があつても歌つて居る間に、簡單化し細かな中間音は省略して三音位にしてしまふ、故に子供の歌ふのミ聞いて居るミ一本調子に聞えて、高低が餘りはつきりしない。幼稚園を參觀して彼の可愛い口元からみんなにきれいな歌が出るかミ期待してゐて、正直な所がつかりするのは幼児は未だ正しく高低を表す事が出来ず矢鱈に大きな聲ばかり出さうミする爲である。

以上は子供の知つて居る歌即ち教へられた歌に就てであるが、初に述べた如く子供は自分で即興的に節を付けて歌ふ、歌ふミ云ふよりも唯しやべるミ云つた方が正しいかもしれない。此節の付いたおしやべりの研究を述べよう。

ネステレ 子供の音楽的創作

A. Nesterle: Die musikalische Produktion im Kindesalter. Beiheft f. aug. Psychol. 52. 1930

子供に童謡や短い文章を示し、それに勝手な節を付けて歌はしたのであるが、此場合子供は藝術家の様に色々な節を付けて面白く歌ふかミ云ふにさうではなく、其間に現れる音ミ音ミの關係は大體定つて居り、而も音域が餘り廣くないので、變化に富んだ美しい旋律よりも、平凡な一本調子の旋律になり勝である。之は子供を非難する爲に言ふのではなく、子供の中に何か神祕的な力のみを見ようとして、子供を啓發し教育する事を忘れた人のために注意するのである。

然らばどんな旋律かミ云へば、其中に現れ来る主な音程は下降の短三度である、即ちミからドミ下る節が屢々現れて來て之が子供の旋律の原型ミ云ふ事が出来る。此場合初のミの音で氣持が緊張し、其緊張が次の低いドの音で緩むので此緊張ミ弛緩を繰返して喜んで居る。其次に六度(ドラ)五度(ドン)等が多く現れる。七度(ドシ)は現れず二度(ドレ)の變化が最も少なく現れて來る音程である。

次に旋律は唯上るだけ、或は下るだけよりも上つたり下つたりするものゝ方が多いが中でも先づ上つて次に下る型が多い。即ち先づ

純粹上昇型

九%

純粹下降型

二

下降上昇型

十一

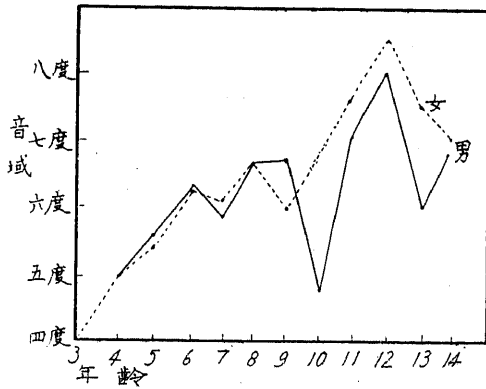
上昇下降型

七十八

氣持を高揚させて次にゆつくり元にもぎる様な歌方をする。

次に音域は三乃至四度以内のものは四、五、六歳兒に多く八歳以上の子供には無くなる。之に對し音域が一オクターブに互る者は九歳頃から後に多くなる。今各年齢の子供の平均の音域を圖示するに次の如くなり六、七歳では平均六度位で此範圍内で聲を上下させて旋律を樂しむで居るのである。

故に子供に歌はせる歌曲も斯る音域内のものを選ぶ必要がある。教へる側からは出来るだけ變化に富むだ面白い曲を教へたがるが子供には反つて苦痛であつたり、自分勝手



五〇

に修正して歌つたりするの切角の努力も無駄になるであらう。

尙此研究に於て子供の歌つた歌の高さを調べて見るに平均して男四、五歳の頃はa²であり、

分り易く云ふに、オルガンの中央の鍵盤のシ(ドレミファソラシのシの音)の所の高さである。八、九歳ではg¹(ファ)に降り十二、三歳に於て再び昇つてg²(ソミラの間の黒鍵)となる。即ち幼兒の頃は甲高く次に一度低くなり又聲變りする前の十二歳頃一時高くなり、その後はずつき低くなり大人の様な低音となる。女の子は四、五歳では男の子程高

くなく、十二歳の時に最高となりその後少しく下つて居るが之も男程でない。即ち子供の時は男の子の聲の方が女の子のより高く、青春期になつてから女の子の方が高くなる。

其他子供の旋律は何度に始つて何度に終るか等の詳細な研究をなして居るが話が餘り専門的になる故に省く事にする。

以上は普通の子供の音楽生活に就て述べたのであるが音楽藝術には幼少の頃から既に天分を發揮した天才が多い。

例へばモツァルトは四歳の時コンチェルトを作曲し、七、八歳で自由に作曲したミ云はれるし、メンデルスゾーンは八歳にしてピアノの名手であり、十五歳にして既にオペラを四つも作曲した。ウェーベルも十二歳の時歌劇を作つたミ云はれるし、リストも十四歳の時オペレッタを作つて好評を得、サンサーンは十六歳の時の第一シムフォニーを作曲し、チャイコフスキーも十三歳で作曲を試みてゐる。シヨバンは十九歳前に既に有名な作曲を多数残してゐる。斯く著名な音楽家は殆どすべて幼少年時代から頭角を現はして居る。故に音楽は全く素質の問題であつて唯練習、訓練のみによつて大を成す事は出来ず優秀な素質と相俟つては

じめて完成するものである。

斯る天才は別しても音楽的才能のある人さもない人を早い頃から識別しておく事は子供の持つてゐる素質を伸す爲に是れ必要な事である。此の爲に音楽才能検査が作られてある。スイーショアは此の方面の大家であつて音楽家として必要な基礎的諸性質を検査する方法を樹ててゐる。例へば音の高さの辨別力では三振動以下の區別が出来れば音楽家となる事が出来る。三乃至八振動で區別出来るものは普通の音楽教育を受けてもよく、九乃至十七振動でなければ區別出来ないもの(普通の女の歌ふ音階で約半音の差)は特別な趣味がある者に限り普通の音楽教育を受けさせてもよい。併し之以上に鈍い者は音楽に關係させない方がよいミ云つてゐる。その他、音の強度の辨別力とか、時間知覺(一秒ミ・〇二秒ミの差等を區別する事)、協和音の感じ方、或はリズム感、旋律の記憶その他の點から同様な検査をする事になつて居る。此の爲には色々の機械が必要であるが、簡単に蓄音機のレコードに吹込んで販賣されてゐるから容易に實用に供する事は出来る。(邦文では高野瀏、音楽適能診断の理論と實際、参照)